

70

1928年東京開催の瑞西バーゼル大学耳鼻科 ジーベルマン教授追悼会参加の三人のスイス人

高橋 薫¹⁾，高橋日出雄²⁾

¹⁾ タカハシクリニック，²⁾ 高橋クリニック

1928年4月4日スイス・バーゼル大学耳鼻科フリードリッヒ・ジーベルマン教授逝去2ヶ月後の1928年6月8日、13人の日本人耳鼻科医留学生者提唱しジーベルマン教授追悼会が増田胤次東大教授司会で東京学士会館で行われた。大日本耳鼻咽喉科會名誉會頭金杉英五郎・會頭岡田和一郎兩博士が同先生の学識人格を称え学蹟及本邦門下生に対する弁を述べ又瑞西国公使書簡を黒須巳之吉氏代読さる。留学生佐藤信郎・浅井健吉・中村豊・黒須巳之吉・津田終吉が先生の風格を偲ぶ。この追悼会にスイス人Thomann, Furtwaengler, Paraviciniの三氏が出席していた。Dr. Hans Thomannは、日本ロシユ学術責任者の薬学博士で、式後記念写真をジーベルマン教授未亡人に進呈。追悼会のレポーター役のDr. Furtwaenglerは、1933年Japan Timesによれば、この追悼会が開催された1928年来日しDr. Paraviciniの後を引き継いだ外科医。Dr. Paraviciniは、愛知大学大川四郎教授によれば駐日公使からの要請で日本赤十字社宛に自身が横浜で書いた1918年の履歴書で「1874年スイスにて出生、祖父、父親の代から医業に従事。ジュネーブ、チューリッヒ、ローザンヌ各大学に学び、更にヴュルツブルグ(独)とピサ(伊)大学にも学ぶ。1896年スイス連邦医師国家資格、1899年スイス連邦医学博士号を取得。ローザンヌ大学附属病院、ベルン大学附属病院、バーゼルランド州立病院、チューリッヒ大学付属病院、バーゼル大学付属病院外科、バーゼル総合病院外科部長代診医、在ロンドン・ドイツ人病院急病担当医、チューリッヒ郊外の物理・食事療医院で同医院勤務の実父の後任となる。」その彼が、なぜ1905年極東日本へ渡航するに至ったのか。死後スイス国内発表の訃報によれば「治療医としての仕事は彼の興味を長くは引き付けることはできず、スイス人仲間と共に横浜で医院を開業しないかという誘いに喜んで応じたからだ」という。Paraviciniは、横浜市内本牧にて外科医院を開業、又横浜総合病院にて外科全般を担当。1921年から1928年は駐日英国大使館・スイス公使館嘱託医をも努める。1914年日英同盟を根拠として日本は、連合国側に立ち第一次世界大戦に参戦。約4000名のドイツ・オーストリア人捕虜が日本移送され、国内各地の俘虜収容所に収容されたドイツ人俘虜と日本人との交流から日本初の第九演奏や、ソーセージ・パン作りが日本に伝わる。1917年1月スイス公使フォン・ザーリスからの推薦で赤十字国際委員会(ICRC)駐日代表に就任。1918年7月ICRC駐日代表部が開設されParaviciniは日本国内8箇所の俘虜収容所を視察した後『日本国内俘虜収容所視察報告1918年6月30日—同年7月16日』をまとめICRC本部に提出した。このパラヴィチーニ報告は、スイス国内で刊行され、第一次世界大戦中の日本における赤十字活動が広く知られる一因となった。第一次世界大戦が終結後、横浜で医業に戻る。1923年関東大震災後もICRCとの関係は続き駐日代表に留まった。日本は1931年満州事変以来戦時色を強め軍部が力を強めてゆく。それ故第一次大戦時ICRC駐日代表としての輝かしい功績にもかかわらず、1941～1944年の間のICRC駐日代表としての仕事は充分発揮できなかった。第一次大戦と異なり第二次大戦では交戦国は複数となり、捕虜収容所・捕虜数が多数となり、更に日本当局・軍部は非協力的となる。例外として死亡者多数の大阪俘虜収容所での赤痢蔓延時、日赤と軍部との交渉が紆余曲折の末、ICRC保有していた薬品を収容所に届けた以外、ICRCの重要な業務である収容所視察において日本当局・軍部が直接俘虜者・抑留者と接触させないため正確な実態把握できず不本意な報告となり欧米では、日本側に都合の良いものとの評価となった。台湾から帰ると1943年7月大量咯血し肺炎となり1944年1月29日亡くなる。資料を下さった愛知大学法学部大川四郎教授、バーゼル大学同窓会長Froscher先生に感謝申し上げます。